
マリオ・オールスタース・レジェンド 【四聖獣伝説】

美怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリオ・オールスターズ・レジェンド 【四聖獣伝説】

【Nコード】

N5571M

【作者名】

美怜

【あらすじ】

世界の『属性』を司る神様が大地に降りる、100年に一度の『降臨祭』に呼ばれたマリオブラザーズ。
今回はワリオ・ワルイージの出番もあるらしい？

【注意！】

これはマリオシリーズを題材にした完全オリジナル作品です。そんなの絶対嫌！な人は『戻る』ボタンをクリックお願いします。

？ はじまりの朝

あなたは、「神様になってみんなを守りたい」と思ったことはありませんか？

これは王国の英雄たちに宿り力を貸した、獣の姿をした神様たちの物語。

「降臨祭^{こうりんさい}？」

赤い屋根の、質素な丸太小屋。

ある晴れた日の朝、兄弟の家に訪れたキノピオに、マリオは怪訝な顔でこう聞き返した。

そんな二人の様子を見守るように、マリオの双子の弟にあたるルイージは、二人の後ろで朝食の後片付けをしていた。

「ええ。今夜は、キノコ王国だけでなく……世界全体に満ちる『属性』を司る神様が、100年に一度大地に降りる夜なのだそうです」
「ふうん。で、その祭にオレに出てほしいって事か？」

名前からして堅苦しそうなものだが、お祭り騒ぎはマリオの大好きなもの。何よりキノピオたちが困っているのならば放ってはおけない。快く承諾しようとしたが、そこで何故かキノピオは言葉を濁した。

「あー、ええ……まあ」

「？」

マリオの疑惑の視線から逃げるように視線を泳がせ、ごによごによとキノピオは言った。

「実はマリオさんだけではなく、ルイージさんにも……」

「……えっ、ボクも？」

普段はマリオが旅に出ている間の留守番ばかりをしているせいで、マリオの影に隠れがちなルイーダが……今日は彼の役目もあるらしい。ぱつとルイーダの表情が笑顔になる。

ところが、そこまで明かしておきながら、未だにキノピオの表情は優れなかった。

「あ……いえ。ルージさんだけではなく、その」

「まだ何かあるのかよ」

「その……あなた達に言うべきことではないのですが」

意を決したようにぱつと顔を上げて、二人の顔をまっすぐ見据えて。真剣なまなざしで、キノピオは言った。

「ワリオさん・ワルイージさんのお二人にも、ご出席していただきたいのです!」

一瞬、沈黙。

「えええええ！」

「ひやつ」

止まった時が突然動き出したかのように、兄弟は同時に驚きの叫びを放った。キノピオがひっくり返る。

「な、何であの二人まで！ てか、直接言えよ！」

「そ、その通りですよ。ですが彼らはお二人も知つての通り、問題の絶えない暴れん坊ですから、その。ええっと」

「……要するに怖いんだね。だからボクたちから伝言してほしいってこと？」

苦笑いと共にそう聞き返したルージの表情を伺いながら、キノピオは力なく「……ハイ」と頷いた。

あーあ、と、マリオは深いため息をついて立ち上がる。

「分かったよ、オレたちから説明してやる」

その答えや彼の行動が。つまり、自らの自分勝手な願いを聞き入れてくれたんだと理解して。キノピオの表情が輝いた。

「ありがとうございます！」

「心配すんな、目立ちたがりのあいつらの事だ。喜んで行ってくれるさ。さ、行こう」

「う、うん」

マリオに促されて、ルイーダも慌てて立ち上がった。

キノコ城下町の裏通りに、人知れずそのあばら家はあった。

「おお！ ついにオレたちにも国の声がかかるとは！」

「やったぜ兄貴！ これでオレたちもヒーローだ！」

思った通り。ワリオ・ワルイーダ両名は、二人の言葉を聞くなり、手を取り合って大いに喜んだ。想像通りの反応を見て、マリオもルイーダも思わず苦笑いを漏らす。

「感謝しろよ？ キノピオが怖がるから、代わりにオレたちが伝言しに来たんだからな」

「はんつ。やっぱりキノピオどもは臆病だなー。で、そんな臆病者の言いなりになってるお前らもお前らじゃねえのか？」

勝ち誇ったようにふんぞり返ってそう言うワリオ。兄弟がむっと顔をしかめた。

「キノピオのことを悪く言わないでよ」

「けっ、事実だろうがよ。ま、お前らがどうしてもって言うなら、堅苦しい挨拶とかもやってもいいんだぜえ？ ヒッヒッヒ」

ワルイーダもけけらけらと笑っている。

マリオらにとって正直気分がよくない事この上ないのだが、キノピオとの約束がある。これ以上の押し問答の上、へそを曲げられて「出ない」と言われては困るのだ。

仕方なく、マリオは二人の顔をじつと見据えた。

「頼むから、出てくれよ」

「……ほっほーう。お前もなかなか礼儀正しくなったじゃねーの」満足そうにジグザグ髭を撫でながらそう言って、ワリオは勢いよ

く、今までふんぞり返っていたソファーから勢いよく立ちあがった。
「気に入ったー！！ 降臨祭だかチンゲンサイだか知らんが、今日からスーパースターの座交代だって世界中に知らしめてやるうじやねえか！ 行くぞー！！」

「おう、兄貴ー！！」

「なっ、おい！！」

マリオが引きとめるのに耳も貸さず、意地の悪さに秀でた兄弟たちは、勢いよくあばら家を飛び出して行った。

「……祭は夜からだっつーの」

「ま、まあやる気は有り余ってるみたいだし。出てくれてよかったね」

「正直、予想以上の食いつきの良さだったけどな」

お互い顔を見合わせ、苦笑い。

「さあ、ボクたちも夜に備えて準備しなくっちゃ！ いったん帰ろう」

「そっだな」

頷きあい、兄弟は誰もいなくなつたあばら家を後にした。

祭は、今夜。

さあ、一体何が起こる？

T o b e C o n t i n u e d .

？ 降臨祭

あつと言つ間に時間は過ぎて。

空に星たちが見え始めた頃、ピーチ城前の広場には、町じゅうのキノピオたちが集まり、王国を治める美しき姫君が現れるのを、今か今かと心待ちにしていた。

バルコニーに備え付けられた舞台の下で、椅子に腰かけたマリオらは、階下にひしめき合うキノピオたちの姿を眺めていた。……約2名は、すさまじくだらしない姿勢だったが。キノじいらが迷惑そうに顔をしかめるのにも、どこ吹く風である。

だらけきつた二人の姿に苦笑いしつつ、普段どおりの桃色のドレスに身を包んだ金髪の女性……ピーチ姫は、マリオ・ルイージ兄弟の前で表情を曇らせていた。

「二人とも。突然こんな事を頼んでごめんなさい」

「いいえ、お構いなく。祭は大好きですから！」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわ」

マリオの言葉を聞いて、ほっとしたように微笑を浮かべ、ピーチは言った。そんな彼女の視線が、兄弟の後ろですっかりリラックスしている二人組のほうにちらちら向けられているのを、マリオは見逃さない。

「……あのな。ふんぞり返るのはともかく、鼻くそほじるのはやめろよ。姫の目に毒だ」

「そ、そうだよ。行儀悪すぎだつて」

「ああん？ オレ様たちはこれから降臨祭の主役になるんだぞ。どうしようとおレ様たちの勝手だろうが」

「そういうこつたい。主役にやる気出して欲しいんならうだうだ文句言っんじゃないぞ、桃姫さんよお」

マリオたちの言葉に、悪びれる事もなく堂々と言い放ったふたりの台詞を聞いて、キノじいの顔がたちまち真っ赤になった。

手に持っていた杖を振り上げて、ワリオ突っ込む勢いである。

「何と失礼な！ 主役は他でもない姫様ですぞ！ 姫様のお心に感謝しないばかりかそのような暴言をっ」

「わわ、キノじい落ち着いて！」

慌ててルイーヂがキノじいの前に立ち上がり、肩を押さえてどうにか落ち着かせようとする。

どうにか乱闘は避けられたものの、キノじいはふうふうと荒い息使いで、敵意をむき出しにした視線をワリオに向けていた。前途多難である。

ワリオとルイーヂの様子をうかがいながら、ルイーヂはそつと声を潜め、キノじいに尋ねた。

「……こんな事になるなら、あの二人呼ばなきゃよかったのに。どうして呼んだの？」

「はあ、それが……」

ルイーヂの言葉に苦笑いしつつ、説明しようとキノじいが口を開いた時。

城壁の上に立っていたキノピオ兵士たちの吹き鳴らすラッパの音が、広場に鳴り響いた。広場から歓声が上がる。

「……仕方ありませんな、説明は後ほど。さあ姫様、参りましょう」

「ええ。それじゃ皆さん、また」

「「はい」」

大きくワリオとルイーヂが頷いたのに微笑み返して。ピーチはキノじいに手を引かれて、舞台上が上がって行った。再び広場から大きく歓声が上がる。

キノじいにマイクを手渡され、ピーチは舞台の真ん中に立つ。

「皆さん。今夜は私たちの為に……そして何より【四聖獣】様の為に来て下さって、本当にどうもありがとうございます」

「……四聖獣？ 属性の神様って奴の事か？」

「……そうみたいだね。動物の姿をした神様なのかな」

舞台の外に声が漏れないように、ワリオとルイーヂは顔をつつき

合わせてひそひそと声を潜める。ワリオとワルイージのほうは、そんなものには全くもって興味はなさそうだ。「出番まだかよー」と、退屈そうにひとりごちている。

「これから先、王国が……そしてすべての世界が、大いなる属性の加護にあるように。今ここに、四聖獣降臨の儀式を執り行います」
そう言ってから、ピーチはキノじいにマイクを返し、一歩前に出て。

よく通る声を上げ、ここにいる全ての人に届くように、唱えた。

「気高き『火』よ!!」

細身の体から、こんな良く通る声がでるものだろうか。決して騒々しくない声が、耳に心地いい。

と、マリオがそう思っていた時だった。

ピーチの声に応えるように、舞台の上に。炎のように赤く輝く何かが、どこからともなくぱつと現れたではないか！

それを見て、思わずマリオは立ち上がる。

「に、兄さん？」

「おいおい、どうしたよ。今になってあがったか？」

弟の声も、自称ライバルの声も、まるつきり耳に入らないまま、マリオは立ち尽くして。

ただ、舞台の上でゆらゆら揺れる赤い光を、じっと見つめていた。

どうしてあんなにドキドキするんだろう。

あんなもの、見たこともないのに。

……いや。

だからこそ、なのか……？

「どうせ、姫さんの魔法か何かだろう。なーにを驚いて……」

「穢れなき『風』よ!」

ワルイージがそう毒づく間にも、儀式はどんどん進行していった。

次のピーチの声と共に、またしても舞台上の上に何かが現れる。
澄んだ緑色に輝くそれを見て、今度はルイージの目の色が変わった。

「お、おいおい……お前まで、何を……」

「……何でだろう、兄さん」

ゆっくり立ち上がって、兄の側にそつと歩み寄って、声をかける。
「何だか……戦いなんて起きてないのに、すごく力があふれる気がするんだ」

「……うん。オレもそうだよ」

弟の言葉に、静かにマリオが応えた、その時だった。

ドオオオオン……！！

『！！！？？』

遠くの方で爆音が響いた。小さく悲鳴も聞こえる。
反射的に4人は舞台の上に駆け上がった。そして……絶句した。
空の上には、見なれた飛行船。船の上に掲げられた黒い旗は、毎度おなじみの怪物の顔を模したもので。

4人の顔色が変わった。

「クッパ……！！」

「つたく、こんなときにまで来やがるか！ あんの大魔王様はよお……！！」

息を呑むマリオに次いで、ワリオが悪態をつく。

またしても攫われてしまっただけじゃない。4人はピーチを取り囲むように立った。

「姫、お怪我はありませんか！？」

「おいおい、オレらの出番もまだねえうちに何の騒ぎだよ！？」

「ああ、みなさん！」

ルイージとワルイージの呼び声で、金髪を振り乱して振り返り。
傷一つない4人の姿を見て、ピーチはほっと安堵の息を漏らした。

「まだふたりしか召喚出来ていませんが……この事態です。仕方ありませんわ」

「……は？ 召喚？？」

4人の頭に疑問符が浮かぶ。

先程の彼女の行動の事を言っていたのだろうか。

「マリオ、ルイージ！ そこに浮かんでいる光に……」

何が何だかわけが分からず首をかしげる4人に向かって、ピーチがそう言いかけた時だった。

「見つけたぞ！！ くれないすずく 紅朱雀！！ ひるいびやうこ 翡翠白虎！！」

雄叫びと共に、船の船首に現れたのは、まぎれもなく。

「クッパ！！」

マリオの叫びに応えることはなく、クッパは……マリオではなく、舞台の上でふわふわと浮かんでいる二色の光に目を向けていた。「こんな小娘の力なんぞを借り、ちまちまと我が復活の邪魔をしておつて。しかし、今年は間に合わなかったようじゃのう？」

「……復活？」

彼の言う言葉の意味が分からず、またしてもマリオらは首を傾げた。

口調も、彼がまとう気配も、普段のクッパとは違う気がする。

戸惑う4人をほったらかしにして、クッパの勝ち誇ったような言葉はまだ続く。

「こがねげんが 黄金玄武としおんせいりゆう 紫苑青龍はまだ居らぬか。ならば好都合！ まずは貴様らの魂、粉々に散らしてくれる……！」

「……っ、マリオ！ ルイージ！」

来るか、と、4人が身構えた時。ピーチがマリオとルイージに向かって、真剣な眼差しで呼び掛けた。

「二人ぶんしか用意できませんでしたが、今は仕方ありません。今すぐ、その光に触れて下さい！」

「……え！？　こ、これにですか？」

「な、何故今そんな事を！　それより今はクツパを追い返さないと……」

「いいえ、今でなくてはいけないのです！」

「……、わ、分かりました」

本音を言えばこのままクツパに飛びかかって行きたいのだが、彼女のそんな真剣な眼差しを受けてはとも断れない。慌ててマリオは頷いた。

ちらりと、自分たちのことをライバルと呼ぶ、しぶとい悪友の姿を振り返って。

「お前ら。オレたちに何が起こるか分からない。姫を頼むぞ」

「けっ。オレ様のライバルがそんな弱気なこと言ってるじゃねえよ」

「おう。サンキュ」

鼻をいじりながらそう毒づいた悪態を、快い承諾だと勝手に解釈して、マリオはそう言っただけで笑った。

弟が不安そうに、緑の光の前でじつとマリオの顔を見つめる。

「に、兄さん」

「なんだ、怖いかな？　じゃあ、まずはオレだけ触ってみる」

「え！？」

「その後の展開を見て、大丈夫そうだと思うたら、お前も触れ。いいかな？」

「う、うん」

「姫。それでよろしいですか？」

「……あまり期待通りではありませんが、あなた達に任せます」

ピーチの返事に少し安心しつつ、頷いて。改めて、マリオは赤い光の前に立った。

……姫が、こいつを呼び出した時。

ルイージの言った通り、オレは理由の分からない妙な高揚感に襲われた。

それが良い事なのか悪い事なのかは、分からない。これから起こることも、何もかも。

クツパは、この光に向かって『紅朱雀』って呼んだ。きっとそれが『四聖獣』のうちの名前なんだ。

この中に、その神様の魂があるっていうのなら。

お願い。

今だけでもいいから、オレに姫を守れるだけの力を――!

「よしっ! ……っ!」

意を決し、マリオは赤い光の中に、白い手袋をはめた手を突っ込む。

燃え盛る炎のように真っ赤な光が、ぱあっと弾ける。

それこそ、目も開けられないほど、鮮やかに、眩く……。

「ぬわあっ!?!」

「おいおい、やっぱマズかったんじゃないかっ!?!」

「兄さあんっ!?!」

仲間たちの声もどこか遠くに聞こえて。

心地よい熱の中で、すさまじい力が、胸の奥からどんどん湧いてくるのを、マリオは感じていた。

それは、大きく大きく膨れ上がる。自分の力だけでは、とても抑えきれないほどに、強く。

「う、ぐ……うあああああっ!?!」

堪えきれない叫びと共に。

ゆっくり、ゆっくり。

意識が、遠ざかる……。

「兄さん!?!」

「マリオ!？」

「おい、赤野郎!!」

大きな悲鳴を上げたかと思えば、突然がっくりと膝をついてしまったマリオの側に、残された3人はたまらず駆け寄った。ピーチだけは、彼らの行動を見守るようにじつとその場に立ち尽くしていた。やがて、マリオはゆっくりと立ち上がる。心配する3人の手を振り払って。

その瞳は、目の前で仁王立ちしているクッパへの憎悪に燃えていた。

「……随分勝手なことをしてくれたな。黒金大蛇^{くろがねおうち}」

T o b e c o n t i n u e d .

？ 紅朱雀

普段の彼とはまるっきり違うその言い回しで。

今、彼は何と言った？

3人とも、その意味を理解出来ずにいた。

「くろ……あんだって？」

「……兄さん」

ワリオが首を捻る傍で、ルイージはただその場で硬直していた。だって、いつもの彼とは明らかに違ったから。口調だけではない。彼がまとう雰囲気そのものが。

バルコニーの手すりの上に飛び乗り、しっかりとクッパの顔を見据え。マリオは静かに、自分を見下ろす『魔王』と、普段の彼等らしからぬ言い回しの会話を交わしていた。

「我ら四聖獣が揃わぬうちに復活してしまうとは。やはり今までの『器』では、我らの魂を担うほどの度量は無かったということか」

「くくく……全くだな。在りし日の力はこれまでに皆無に等しかった。我を戒めていた封印も、日に日に弱っておったわ！」

「だが、それももう終わりだ」

「……何？」

怪訝な顔をし、クッパが聞き返す。

自分の体を満足そうに見下ろして、マリオは言った。

「こ奴は今までとは違う。我が『火』の力が身体によく馴染んでおる。今にこの『器』は完全に我が魂の支配下に置かれ、今までで最大の力を発揮するだろう。その時が貴様の最期だ、黒金大蛇」

「何だって!？」

その爆弾発言に驚愕し声を荒げたのは、クッパではなくルイージで。それに少しの疑問を抱き、マリオはルイージのほうを振り返った。

「何だ、貴様は。何故貴様が驚愕する」

「兄さんを……どうしたの」

「何？……ああ、なるほど。貴様はこの『器』の血縁者というところか。そして……翡翠白虎の『器』」

納得したように数回大きく頷いて見せ、マリオは人を嘲るような不快な微笑を浮かべた。それこそ、つい先ほどまでの彼ならば、絶対にその顔に出ることはなかったもの。

「どうした、何をしている。貴様も選ばれし者ならば早く翡翠白虎と共鳴をしろ」

「ボクは『兄さんをどうしたの』って聞いてるんだ！」
「……」

自分の命令をぴしゃりと跳ね付け、同じ質問を繰り返す。その確固たる姿勢を見て、マリオは……いや、紅朱雀は。ふん、とその凜とした姿を、軽々と鼻で笑いとばした。

「話にならん。『器』は『器』らしくその役目を全うするべきだといふのに」

「兄さんっ！！　ねえ、返事をしてよ兄さん！！」

「さあ、黒金大蛇よ」

必死に呼びかけるルイージの声には耳も貸さず、紅朱雀は頭上のクツパをキツと睨みつける。……その直後。

紅朱雀の魂を憑かせたマリオの体に、ふわりと赤い揺らめきが見え。

そして、次の瞬間。彼の背中には、不死鳥を想わせる紅蓮の翼が煌々と輝いていた。

「数多の罪を犯した貴様の魂……その身体ごと滅する！　覚悟せよ！！」

迷うことなく、空中へ足を踏み出す。背中に現れた翼を器用に操り、紅朱雀は一気に空飛ぶ帆船の近くまで舞い上がった。

「くくく……来い！　貴様一人で何が出来る？　翡翠白虎に貴様の死にざま見せつけてくれようぞ！」

クッパも立ち向かう。

船の上で、激戦が幕を開けようとしていた。

「……お、おいテメエ」

黙ってふたりの険悪なやり取りを見ていたワルイージが、恐る恐る俯いているルイージに声をかけた。

「テメエも、あいつが言ってた『共鳴』ってのしてよお、加勢したほうが……」

「嫌だよ」

答えはすぐに帰ってきた。

「おいっ！」

「嫌だよ！ あんな奴に加勢するなんて……」

ぱつと顔を上げ、ライバルを睨みつける。兄と同じ青い瞳には、うつすらと涙が滲んでいた。

「君たちに分かる？ 血を分けた兄弟があんなにも豹変してしまったことがどんなに辛いことか！ 君たちに、今のボクの気持ちがかかる……」

「ルイージ……」

「このままあいつの意識に吞まれて、兄さんが消えるのは嫌だ。でも、兄さんを消してしまおうとしているあいつに協力するなんて、もつと嫌なんだよっ……」

ピーチが悲しげに顔を歪めている。

姫を守るために、自らの意識を消されようとしている兄。それを黙って見ているしか出来なかった弟。

彼の悲痛な叫びがバルコニーにこだまする。

「ボクだって……どうしたらいいか分からないんだよおっ」

ぼろぼろと涙が零れる。

行き場のない怒りと悲しみは、定まらないままぐるぐるとバルコニーを駆けずり回る。

「君たちがやればいいじゃないかっ！ これは、何もボクだけが出

来る事っていうわけじゃ……」

「そいつぁ……そいつぁ違うだろっ！」

そんな流れをせき止めたのは、紫の服を着た細身の男の一喝だった。

はっとルイーヂが、途切れることなく混乱の叫びを発していた口を閉じる。

「そうさ、オレ達は実の兄弟ってわけじゃあねえ。だからこそ、赤野郎を正気に戻す役目はテメエにしか出来ねえんだよ！ それにその緑の光に触れたからって、完全にあいつの味方になっちまうとは限らねえだろうが！！」

激情を心のままに唇に乗せ、ワルイーヂは一気にまくしたてる。

「……ワルイーヂ」

「心配すんな。馬鹿正直なテメエのこった。心まで悪役にはなりきれねえさ。赤野郎がクツパを殺しちまう前に、一発ぶん殴ってやれよ」

最後の台詞は、妙に優しかった。が、その言葉は紅朱雀の言った言葉の意味をありありと見せつける。

『身体ごと滅する』兄の体を借りた奴は、そう言った！？

「……駄目だよ。やっぱりこの光はまだ触れない」

「あん？」

「兄さんを元に戻すのは、ボク自身のやるべき事だから」

そう言って、ルイーヂは強くバルコニーの床を蹴り、一気に空高く跳躍した。

緑の服を着た体はみるみる上昇し、あっという間に紅朱雀とクツパがいる船の浮かぶ高度にまで達する！

意外な登場に、切り結んでいた二人も驚きのあまりに固まった。

「なっ、貴様は！？」

「兄さああああんっ！！！！」

紅朱雀が何かを言うより早く。

優しい弟は、兄の体に思い切り抱きついた。

「お、おいっ!？」

「無茶しやがるなあ……」

「ルイージ!!」

3人の声が遠くに聞こえる。随分高いところまで飛んだんだな、と、必死にしがみ付く中で、ルイージは思った。

「な、何をする! 邪魔だ、離せ!!」

「嫌だ、絶対離さない! ……兄さん!!」

今手を離せば、自分は遠く離れた地面にまっさかさま。それにより、声がマリオに届かない。

自分の思いのたけ全てをぶちまけるように、ルイージは必死に呼びかけた。

「ねえ、聞こえてるだろ!? ボクだよ、ルイージだよ! お願
いだ、返事をしてえっ!!」

「ぐっ……っ!」

何故だ。

今までで最高の共鳴率を誇っていたというのに。

何故、定着しかけていた精神が、揺らぐ?

「……う。ルイー……ジ?」

「!!! 兄さん!？」

かすかに聞こえたその声を、ルイージは聞き逃さなかった。

ああ、いつもの声だ。少しだけだけれど、戻ってきた!

頭ががんがんする。

さっきから頭の中でわめくのは、ついさっきまで自分の体を借り、

許し難い行為をしていたもの。

彼は関係ない人物ごと、誰かを滅ぼしてしまおうとしていた。そして何より、自分の家族を傷つけた！

（邪魔をするな……『器』の分際で……！）

「そいつあ悪かったな。でも家族が呼んでたら……答えないわけにはいかないだろー！」

（……くっ）

「安心しろ、消え去れとは言わない。せめてオレの中で大人しくしてろ……！」

紅朱雀の意識が消えた事を現すかのように。

マリオの背中で輝いていた翼が、突然消え去った。

それと同時に、二人の体は重力に引かれ、がくんと落下を始める。

「うわあああつー！」

「おいっー！」

反射的にワルイージが駆け出し、細身の体を精一杯のり出した。

「手え、伸ばせー！」

「う、うんっ」

反射的にマリオと手をつなぐ体制を作り、ワルイージの伸ばしてくる手に向かつて精一杯手を伸ばす。伸ばしあった手と手は近づき、やがてしっかりと握られた。

「おい兄貴、手伝え！」

「お、おうっ」

声もなく彼らの行く末を見守っていたワリオが、慌ててバルコニーに駆け寄る。

二人がかりで、兄弟の体はどうかバルコニーの上に引き上げられた。

4人はせえせえと肩で息をする。心配そうにピーチが4人の顔を覗き込む。

「あの、大丈夫ですか……？」

「この様子を、見てっ、大丈夫に、見えんのかっ、てめえはっ！」

「はあはあ……いいんだよ、ワルイージ。無事だったんだもの」

「……ルイージ」

そつと、しっかりつないでいた手を離す。それと同時に。

突然、ルイージは思い切りマリオにしっかりと抱きつかれた。

「ごめんな。あいつを通して、見てた。見てただけで、何も出来なかった」

あいつと言うのは、言うまでもなく紅朱雀のことだろう。

肩が小刻みに震えている。

涙を必死にこらえているのだろう。

「いいんだよ、兄さん」

戻ってきてくれたのが嬉しくて。それに何より、兄の想いが嬉しくて。

そつと、兄の体を抱きしめ返した。

「こうして、戻ってきてくれたんだから」

「……おい。感動の再会はいいけどよお」

ワリオが唇をとがらせつつ話に割り込んできた。突然恥ずかしくなり、ふたりは慌ててお互いの体から離れる。

「な、なんだ？」

「紅朱雀が消えちまっただけで、事態は全く解決してねえんだが」

そつ。

彼らの頭上には、まだあの忌まわしき帆船はあったのだ。

T o b e C o n t i n u e d .

？ 去りゆく魔王

「……とんだ茶番を見せてくれたな。貴様ら」

空に浮かぶ帆船の上で、4人がいるバルコニーを見下ろしながら。そう、クツパの体を借りた何者かが吐き捨てる。

マリオが、見なれた魔王のごつい顔を睨み返した。

「黒金大蛇、とかなんとか名乗ってたけど。あんた、一体何者だ」

「それを知りたいのか？ もはや消えゆく運命にあるという貴様らが」

「へっ、そう簡単に消されちゃたまんねえよ」

ワルイージが負けじと言い返す。

面白い、と、大魔王の体で、黒金大蛇は意地の悪い笑みをこぼす。

「ならば、四聖獣に聞くがよい。我がわざわざ説明してやるまでもないわ」

「ああん？ 逃げんのかよテメエ」

「フン、そんな安い挑発には乗らん。……緑の男よ」

「……っ」

名前では呼ばれなかったが、単語で自分の事を呼ばれたことが分かって。無意識に、ルイージはぶるりと肩を震わせた。

「お前も選ばれし『器』ならば、その役目を全うして我と戦うべきではないのか？ 激情に駆られて紅朱雀の意識を『器』の中に押し込めてしまうとは、何たる愚行か」

「……ぼ、ボクは」

「我は四聖獣ともしか戦う気はない。揃ったら、首を揃えて我が祖国へ来るがよい！」

そう高らかに宣言した時。帆船が、くるりと方向を変えて動き出した。

方角的に、そちらの方向は王国を出て、海を越えてしまう。

「ま、待て！！」

「また会おうぞ、『器』ども!!」

4人の跳躍力をもつてしても、あそこまで引き離されてしまった
はもう、船の上までは届かない。

高笑いと共に、帆船は豆粒のように小さくなって行ってしまった。

「……それで、だ」

ところ変わって、ここはキノコ城の客間。

キノピオに出された紅茶を囲んで、ピーチに見守られながら。 4
人は難しい顔をしていた。

「これからどうする？」

「そりゃあ、クッパを追いかけるに決まってるだろ」

「どうやって？ どこに行ったかも分からないのに」

「四聖獣ゆかりの地ってのはねえもんかね」

「姫、何か御存じありませんか？」

「そうですね……」

唐突にマリオにそう尋ねられて、ピーチは過去の記憶をどうにか
思い出そうと、目を閉じてじっと考え込んだ。 4人はただ黙って彼
女の様子を見守る。

やがて、深い深いため息が、ピーチの口から洩れる。

「……ごめんなさい。私には分かりません」

「そうですね。お気になさらず」

「そう言えば、奴は『四聖獣に聞け』って言ったよな？」

思い出したように、ワリオがマリオとピーチの間に割り込んだ。

顔をしかめながらも、マリオは「ああそうだったな」と、彼の言
葉に相槌を打つ。

「だが、どうやって聞く？ 紅朱雀はもういるかいにか分からない
のに」

「え、ええつ。ひょっとしてボク、取り返しのつかない事しちゃっ
たのかなあ」

「いや、まだいるだろ」

ずるずるずる、と、盛大に音を立てて紅茶をすすりながら、ワリオがいきなりのんびりと言った。

一同の視線が一気にそちらへ集中する。

「緑の光がまだ残ってる。あーっと、名前なんだっけか、姫さん？」

「翡翠白虎、ですか？」

ピーチが、バルコニーの外でぼんやりと浮かぶ緑の光にちらりと目をやりつつ、聞き返す。

「おう、そいつだ。ルイージがそいつになりやあいい」

「……えっ」

びくりとルイージが固まる。

自分も、つい先程までの兄のようになってしまっただろうか？

愛情のかけらもないその言葉で、誰かを傷つけるようになってしまっただろうか？

一度でもそう考えてしまうと、とてつもなく怖くて。とても、肯定の返事を返す事など出来なかった。

と、その時。

「……大丈夫。心配すんな」

俯くルイージの肩に、マリオの手のひらがぽんつと乗せられて。

はっと顔を上げてそちらを向くと、優しいほほえみをこちらに向ける、最愛の兄の姿があった。

「お前に何かあったら、さっきのお前みたいに、オレが全力で止めてやるから」

「……兄さん」

「な？」

何でだろう。

兄さんの言葉は、いつもボクに絶対の自信と勇気をくれる。

小さいころから今まで、それはずっと変わらなかった事で、だからこそボクたちはお互い変わる必要はなかった。

そうやって兄さんが背中を押してくれるから。兄さんが、ボクにだけ助けを求めてくれるから。

こんな臆病なボクでも戦える。

お化けが出そうな所にだって、どんな怖い所にだって行ける。

何だって、出来たから。

それは、今だって……。

「……、うん。分かったよ」

意を決して、ルイージはすつくと立ち上がった。

「やってみる」

「おうおう、それでこそ我がライバルの弟だあ」

「兄貴。いい具合に『永遠の2番手野郎』に面倒事押しつけようとしてるな？」

「何の事かな弟よ？ はっはー」

「……実の兄を目の前にして随分な言い草じゃないかお前ら」

「いいんだよ、兄さん」

悪友たちの実に失礼すぎる会話を聞いて、危うく殴りかかろうとしていたマリオを、ルイージのやんわりとした言葉が押しとどめる。「いいんだよ、『永遠の2番手』でも。ボクの1番はいつだって兄さんなんだもの」

そんなマリオが、また元気づけてくれたから、今度も自分は大丈夫。

さあ、全ては手がかりを得るために。

自分の体を、四聖獣に差し出そうではないか。

自分の目の前には、ぼんやりと淡い光を放つ緑色の力の塊。
先ほど大口をたたいてしまったものの、こうして目の前にしてみ
ると、どうしても無意識に体が震えてしまつて。

そんな往生際の悪い自分自身を、ルイージは心の中で叱咤した。
（しっかりしろ、怖がつてどうする！ みんながいるんだ、大丈夫
に決まつてるだろ！）

「ルイージ？ 怖いんなら、心の準備が出来てからでも……」
「大丈夫だよ」

マリオの言葉を遮り。震えそうになる言葉を必死に抑えて、振り
返らずにルイージは言う。

「大丈夫。だから、兄さんは何も心配しないで」
分かつてる。

自分はいつも助けられてばかり。
だから今度くらいは、兄の手を借りなくても、自分の意志で。
どうしようもない恐怖を、振り払え！

兄が、自分の悪友が、兄の悪友が、兄の愛する姫が。それぞれの
面持ちで見守る中。

「……っ！！」

一気に、光の中に手を入れた。

T o b e C o n t i n u e d .

？ 翡翠白虎

目の前が緑色に塗りつぶされていく。

弟が光の中に手を突っ込んだ次の瞬間、マリオはそんな風に思った。

かすかに聞こえるのは、荒れ狂う風の音と轟く雷鳴。

弟が潜在的に持つサンダーの力と、互いに引き合っているのだから。

「ううっ、あ……！」

雷が身体を焼き焦がすような、そんな苦痛の声で。はっとマリオは我に返り、慌ててルイーダの側に駆け寄ろうとする。

「ルイーダっ！？」

が、自分が足を踏み出そうとするより早く。

「来ちゃ駄目……っ！ ボク以外は、駄目だ……！」

ぴしゃりと、痛みを必死に堪えるようなルイーダの声に遮られる。彼自身の確固たる意志を汲み取り、マリオはそれ以上そちらへ近づこうとはしなかった。

（そうだよ、な。この苦しみは、何より一番オレが分かっている）

それはそうだ。自分は、つい先程この現象を、身をもって体験しているのだから。

（でも……それをオレは、黙って見ていられるのか？）

「おいっ、マリオ……！」

いきなり後ろから怒鳴られ、素早くマリオは振り返る。無然とした顔をしたワリオが、こちらをジト目で睨みつけていた。

「てめえがあいつに『大丈夫』って言ったんだろっ。さっそく前言撤回してんじゃねえよ」

「……そうだったよな。すまん」

「けっ。てめえに謝られるなんて、慣れなくて反吐が出らあ」

無然とした表情は崩さないまま、ワリオは唇を尖らせてこう返し

た。

声が、聞こえる。

（そなたは、優しい男だ）

「う、……？」

（紅朱雀が悪い事をした。奴に代わって詫びよう）

雷に身を焦がされ、烈風に身を斬られるような感覚を全身に浴びながら。

ルイージは、痛みに歪む顔をゆつくりと上げた。……当然だが、誰もいない。緑色に輝く圧倒的な力の束と、自分たちの危機など知る由もない星空があるばかり。

そんな荒れ狂う空間の中で聞こえるその声は、威厳あふれる中にどこか穏やかなものが見えた。それは自分の周りにある雷と風の激しさからは、とても想像がつかないもの。そんな口調と言いまわしの中に、ルイージはほんの少しだけ兄・マリオの面影を見た。

（奴めも驚いてたようだが……ここまでわしの力に近い素養を持つてる奴は、そなたが初めてじゃ。黄金玄武も紫苑青龍も、きつといい奴に出会えたらうに。それがまさか間に合わなかったとは……）

「何を……言ってるの？」

（少しばかりそなたの体、借りるぞ。案ずるな、後ほどしっかりそなたに返してやる）

「ねえ、だから何を……ッ!？」

噛み合わない会話に若干苛々しながら言い返そうとした次の瞬間。胸の奥から、何やらすさまじい力が溢れだすのを感じ、思わずルイージは胸を押さえてその場にうずくまってしまう。

心が擦り減らされるような感覚。意識がどんどん遠ざかる。

（兄さんも……こんな感覚を味わっていたんだね）

皮肉めいた笑みをぼろりと零して、ルイージは目を閉じた。

荒れ狂う力が静まり、自分の中にずっと収まって行くのを感じながら。

光が収まった。

先ほどのまでの荒れようが嘘のように静まり返ったバルコニーには、ルイージがただ静かにその場でうずくまっているだけで。

ひょっとして失敗したのだろうか。恐る恐る、マリオは弟の背中に声をかけた。

「……ルイージ？」

「いるのだろうか？ 紅朱雀」

「！？」

マリオの呼び掛けに応えるより早く、ルイージはしっかりと立ち上がってこちらを振り返った。

声や姿はルイージのままなのに、その時点で彼のまとう雰囲気は、がらりと変わっていた。気品とかそういう現実的な部類を通り越して、神々しいほどに。その雰囲気を見て、ワリオとワルイージは、つい先程のマリオの姿と今のルイージの姿を、思わず重ねていた。いや、違う。今の彼は『ルイージ』ではない。

ピーチも言ったその名前。あの場で彼女が呼びだす事の出来た、もう一人の四聖獣。翡翠白虎だ。

戸惑いながら口を開いたのは、ワルイージだった。

「く、紅朱雀は……消えちゃったんじゃないのか？」

「分からぬのか？ 『器』が意識を無理やり押し込めようとしたおかげで、『器』自身の能力そのものに定着してしまったのじゃ。まあ無理にそうしようとせんでも、わし等がやるうと思えば簡単に出てしまうのだが」

「えーと……」

「つまり、今も紅朱雀は『器』の中におり、わしらの姿を見ている。そういうことだ。とんだ無駄骨だったのう」

そう言ってカラカラと笑う。3人はただその場に立ち尽くして茫然とするばかり。

自分自身、何度かの冒険でそういう非現実的なものに出くわして

いるとはいえど、やはりそう簡単に信じられる事ではないのだ。

言葉を失っていると、翡翠白虎はマリオのほうに視線を向け、意地の悪い笑みを浮かべて見せる。それこそ本来のルイージならば、ほぼ絶対に浮かべる事のない表情だった。

「それならば、わしの声が聞こえないはずはないじゃろう？ ……

紅朱雀、表に出て来い」

「表？ ……うつ」

またしても聞きなれない言葉を発し、皆が疑問符を浮かべたその時。突然、マリオが胸をおさえながら、その場にくず折れたではないか！

慌てて悪友義兄弟が彼の側に駆け寄った。

「おい、なんだ？ いきなりどうした！」

「マリオ！？」

「……しばらくの間に随分意地の悪い性格になったものだな。翡翠白虎よ」

先ほどの苦しみようが嘘のようにすくと立ち上がったマリオが、静かにそう言う。冷やかなその言い回しの台詞を聞いて、ワリオもワルイージも驚愕した。

「な、その口調！ 紅朱雀のっ」

「何を驚いている。我があの程度で消えるとも思ったか」

「いい加減『器』に喧嘩を売るのはやめぬか、紅朱雀」

涼しい顔で言い放つ紅朱雀をぎろりと睨みつけ、翡翠白虎がたしなめる。

「今が万に一つの非常事態だということぐらい、そなたならば分かるじゃろう？ いい加減その人間嫌いを直せ」

「我に人間を好きになれとでも言うのか、貴様は？ それこそ万に一つもあり得ない事象だ」

「っておいこら！ 俺たちのライバルの体使って喧嘩すんじゃないやねえよっ」

ワリオが、険悪なムードが漂い始めたふたりの間に割り込んだ。

ワルイージもピーチも、ふたりのほうを憮然と睨んでいる。

ぐつと言葉に詰まったように顔をしかめる紅朱雀。翡翠白虎は「それみる」と小さく呟き、ワリオらの方に向きなおる。

「……今日という祭りの日に、このような事になってしまって、誠に申し訳ありません。あなた方のお怒りももつともです。しかし」
今までもずっと黙って様子を見守っていたピーチが、ゆつくりと顔を上げ、ふたりのほうをしっかりと見据え、言った。

「今回の事件をおさめるには、あなた方だけではなく、他のふたりの四聖獣のお力も必要となります。あなたがたの肉体が眠る地についてご存じありませんか？」

「ほう。それでわしは一足遅れてそなたらの前に現れたということか」

納得したように大きく頷く。

一呼吸おいて、翡翠白虎は再び口を開いた。

「わたしの故郷と言える国は、ここよりはるか東にある。『源国』
と呼ばれる戦に明け暮れておったあの国も、長い年月を経て戦も終わり、国の名も変わってしまった」

「ふん、過去を忘れようとするのは人間どもの悪い癖だ。……今は『オリエント王国』とかいう名前になってしまったようだな」

遠い昔を懐かしむように目を細める翡翠白虎に続き、紅朱雀が静かにそう吐き捨てた。

数秒ほど考え込んだ後、ワルイージは「あー！」と、思い出したように両手を打ち合わせた。

「あの変わった服着た連中の国かあ。前に町の本屋からネコババした雑誌に書いてあった気がするぜ」

「……わ、私もキノじいから聞いたことがあります。私たちと比べると、やや特殊な文化を持っているようですね」

聞き捨てならないセリフが混じっていたような気もするが、罰するのは落ち着いた後でもいいだろう。そう勝手に結論付け、ピーチも頷いて彼に賛同した。

「そこに行けば、残ったふたりに会えるのか？」

「ふん、貴様らだけが行ってもどうにもならんわ。たわけ」

「たとえ我らが『表』に出たとしても、わしらが彼奴らを直接たたき起すことは出来ん。昨晚と同じ召喚の儀を行うべきじゃ。その娘が共に行くか、源国で召喚の術を持つ者を探すしかないじやろな」

「ほうほうなるほど。で、姫さんはどうすんだい？」

鼻をほじりながらワリオにそう尋ねられ、ピーチは少し言葉を詰まらせた。

自分はこのキノコ王国の気高き姫。自分の意志だけで勝手にこの国を離れることは絶対に許されないこと。特に、執事であるキノじいは、遠い異国への彼女の外出を決して許さないだろう。

クッパは、方法とはかく、四聖獣の敵である黒金大蛇に乗っ取られている。彼の目的は四聖獣だけなので、今のところ彼に自分が狙われる心配はない。しかし、今やピーチの敵はクッパひとりだけではないのだ。

しかし、自分は四聖獣の魂を呼び出す術を持っている。それに何より、これは彼ら4人にとって、きつと危険が伴う旅になる。

彼女自身の立場として、これを放っておくことはとても出来なかった。

「出来ればついて行きたいですが……私は」

「ついて行きたい？ そうじゃねーだろ、ついて来いよー。どれだけ広いか分からん王国でたったひとりを探し出すなんて面倒なこと、俺はごめんだぜ」

「ええ、私個人としてはそうしたいのですが、私にはこの国を治める責務が……」

「ん？ おい！」

立場と私情との間で揺れる彼女の言葉を遮ったのは、今までつまらなそうにバルコニーの向こうを眺めていたワルイージの声だった。「あっち、確かクッパの野郎が飛んでった方向だよな。そっちから

「何か来る！」

「まあ、本当ですか？」

「ただの鳥なんじゃねえのかあ？」

「む？……もしや！」

彼の言葉を聞き、聖獣らの顔色がさつと変わる。ふたりはすぐにバルコニーに駆け寄り、ワルイージの示した方向をじつと凝視した。やがて、ふたりの顔つきが険しくなる。紅朱雀が、小さく「やはりな」と呟いた。

「これで、小娘は我らと行かざるを得なくなった」

「そのようじゃ。黒金大蛇め、小癪な真似を！」

「おいおい、何がどうなってるんだよ？」

「器ども。呆気にとられている暇があるならば、構えろ！」

ふたりが、ワリオらのほうを振り返る。

その顔は、どこまでも真剣だった。

「敵襲だ！」

T o b e C o n t i n u e d .

？ 敵襲

紅朱雀のその言葉に、誰もが驚愕した。

「敵襲だつてえ！？」

そう叫びながら駆け出したワルイージの言葉に、ワリオとピーチも弾かれるようにバルコニーに駆け寄って、そちらの方向をじっと見つめる。

やがて、こちらにまっすぐ向かってくる集団を見つけ、思わず3人は声を失った。

「……なんという大群ですか」

「多すぎだろ、いくらなんでもよお……」

「姫さんだけでも逃がした方がよくねえか？」

啞然とする3人。普段は怖いもの知らずであるワリオとワルイージだが、こればかりは流石に腰が引けた。見る限り、ざっと100匹以上はいるだろうか。敵襲、と聞いてわずかに湧いた闘志がへなへなと音を立ててしぼんでいく。

そんな彼らを、紅朱雀は意地の悪い目つきでじろりと睨み、煽るように鼻で笑ってこう言った。

「何だ貴様ら、そのような情けない顔をして。もしか、怖気づいたか？」

「あんだとう！？」

「貴様らの力を見せてみよ。まあ、我らには足元も及ばぬだろうかな」

「敵勢力の前でつまらんいがみ合いはやめぬか」

翡翠白虎にたしなめられ、むっとしたように紅朱雀は顔をしかめる。どこか子供っぽいその表情は、その肉体だけに、普段のマリオにとっても良く似ていた。

やがてそんな顔も、ぐっと引き締まった凛々しい顔になる。それにつられて翡翠白虎も同じような表情になる。これも普段の兄弟と

よく似たものだった。

ふたりが、颯爽とバルコニーのフェンスの上に飛び乗って。

「さあ、来るぞ！」

翡翠白虎の言葉に応えるように、『マリオ』の背中には、先程クッパとやりあった時と同じ赤い翼が、突如としてぱつと現れる。きらきら光る赤い火の粉をまとった翼。こんな時でなければ、誰もが言葉を忘れて見とれる美しさだった。

そして、彼と同じように。

翡翠白虎の両手首・両足首に、澄んだ緑色の雷が、腕輪のように現れて。ひと際強く光るその4つの輪から、更に何本もの稲妻が『ルイージ』の体をまとい、バリアのようになっていくのが見えた。

両手の指を、力を確かめるように何度も握ったり開いたりした後、翡翠白虎は、ぐっと上半身を低く下げて、獣のような構えをとった。そう、まるで猛々しい虎のような。

もうすぐそこまで迫って来ていた敵軍勢を見上げ、面白そうに紅朱雀は言った。

「先ほどは器に邪魔をされたが……器の力を試すいい機会だ。軽い小手調べと行こうか」

「これが小手調べだあ！？ あんたら命知らず過ぎるぜ、いくら神サマだつってもよお」

ワルイージが思わず非難めいた声を上げる。

その言葉にわずかに反応を見せたふたりは、ちらりと3人の方を振り返る。

何も言わずにどこか悲しげな表情を見せる翡翠白虎を尻目に、紅朱雀は皮肉めいた笑みを浮かべて言った。

「命知らず、か。ふん、面白い事を言う」

「我らは人間に滅ぼされた身。命などとうにないわ」

一瞬、耳を疑う。

「……あんだって？」

ワルイージが聞き返そうとする間もなく、ふたりはフェンスを蹴って宙に舞った。

赤い炎、緑の稲妻。

二色の光が敵を次々となぎ倒していくのを、3人はただ呆然と眺めていた。

時折ふたりが取りこぼした、ほんの数匹のわずかな敵を、ワリオがワルイージのどちらかが殴り倒す以外は、彼らの出番はほとんどなく。

「……強えーなあ、あいつら。いつものあいつらじゃねえみてえだ」
いくらかの時間が過ぎた時、ワリオはどこか退屈そうに、唇を尖らせてこう呟いたのだった。

「まあ、いつもの彼らではありませんもの。オリエント王国の摂理を統治する神々が、マリオとルイージに憑依しているわけですから」
普段の彼らが使う力ともうまくリンクしているようです、と、ピーチは心から感心しつつふたりに言う。説明のようなその言い回しに、ワリオは「んな事あ今頃言われなくなつて知ってるよ」と、再び不機嫌そうに唇を尖らせた。

「でも」

ふたりに聞こえないように、ワルイージは小さく呟く。

ふたりが意識してこの話題を避けているのは分かっていたし、それに今この話をしてしまったら、何となく嫌な雰囲気になりそうだったから。

「神様の癖に、人間に殺されちまつたんだよなあ」

だから、人間である自分たちに対して、あんな高圧的な態度をとるのだろうか。いちいち自分たちに突っかって来る理由も。

そう考えると。

（……面白くねえなあ）

紅朱雀が少しだけ明かした事実には驚いたのは、なにもワリオらだけではなかった。

それは、神の意識に自分の意識を追いやられ、心の奥まで押し込められ、肉体を通じてその様子を見聞きしていた彼らにも、同じ事。「あいつ、人間に殺された……そう言っただけ」

「だからボクらに対して、あんな偉そうな態度をとってるのかな。」

……翡翠白虎は気さくな神様みたいだけど」

どうやら彼らに憑依されると、器同士であっても、声に出さない意思疎通が出来るようになるらしい。

紅朱雀と翡翠白虎の戦いの邪魔をしないように、マリオとルイージはなるべく声を潜めるように集中して、そんな会話をしていた。「いろいろ事情がありそうだね」

「オリエント王国つーところに行けば、何か分かるのか？」

「だったらいいんだけどね……うッ!？」

「ルイージ!? どうした!?!」

会話を遮って突然苦しみ出した弟の声を感じ、マリオは思わず声を荒げる。

くぐもった声をあげつつ、ルイージはかすれた声で兄の声に応えた。

「く……い、今、突然脇腹辺りに衝撃が……いたた」
「何っ?」

精神の中にまで敵がいるのだろうか。兄弟の間に緊張が走る。

と、すかさずそこに、翡翠白虎の声が降って来た。

（すまぬ、避けきれなかった。大事ないか?）

戦闘中だからだろうか、その声には荒い息が混じっていた。まだ本調子じゃないのかな、と、ふたりは薄々感じた。

「だ、大丈夫だよ。今のは一体?」

（憑依する我らと憑依される貴様らは、互いにすべての感覚を共有し合うのだ。それはもちろん、我らが痛手を受けた時も同じ事）

「あんた達がダメージを受ければ、オレ達もその分だけ同じダメージを受けるってことか？」

（左様じゃ。そしてそれは、そなたが表に出ている時も同じじゃ。痛みを受けすぎれば我らの意識は消えてしまふ。そなたの命も保障出来ん）

命は保証できない。その言葉で、自分が今異国の神と一体になっていることを実感し、ふたりは少しだけ背筋がぞっと寒くなるのを感じる。

そこへ、紅朱雀がぴしゃりと力強くはっぱをかける声を降らせた。
（そら、無駄話をするでないぞ翡翠白虎！）
（おっと、その通りじゃった）

そんな威勢のいい会話が聞こえたきり、突然ふたりの声はぷつりと途絶えてしまった。

「つて、ちよつと？ もうおしまい！？」

「あーあ。回線が切れちまったらしいな」

「……回線って、電話じゃないんだから」

まったくもう、と、呆れたようなため息混じりの声が聞こえてくる。もう苦痛の色はないようで、マリオはほっと息をつく。

「さあてと」

誰にともなくそう声を上げ、マリオは目の前の光景に視線を移す。異国の神々が見ている光景を、自分の肉体の中身に押し込められながら。

「あいつが解放してくれるまで、高みの見物といくかあ」

ルイージの体を借りた翡翠白虎を傷つけた一撃は、外界で戦いを見守る3人もすっかり目撃していた。

「今、ルイージに攻撃が当たってしまいましたか……！」

「結構深く入ったぞ、今。平気かよ」

さっと青ざめるピーチと、柄にもなく心配そうな様子のワリオ。

「まあ平気だろ。あいつ、案外不死身だぜえ」

それはお互い様だろう、というセリフはあえて言わない事にする二人であった。

赤い炎と緑の電撃を浴び、最後の1匹が地面目がけてまっさかさまに落ちていくのは、間もなく。

飛び立った場所と全く同じ場所に、ふたりは軽やかにすんと降り立つ。

小さく息をついて、紅朱雀は満足そうに言った。

「初陣にしてはまずまずだったか」

「うむ。犠牲者なしの勝利とはいいいものじゃ」

「犠牲者って……胸糞悪いこと言うんじゃないよ」

思わずワリオが顔を歪める。ワルイージが憮然と顔をしかめ、ピーチも悲しげに瞳を伏せる。

そんな3人の様子に、翡翠白虎は申し訳なさそうに苦笑いをしたが、紅朱雀は相変わらず涼しい顔だった。

「貴様らは我らが生きてきた時代を知らぬ。だからそのような軽々しい事を言えるのだ」

「これ、紅……」

「我は疲れた。しばらく休む」

翡翠白虎の叱責を遮り、そう言い捨てた紅朱雀は、ふいにすっと目を閉じた。

ふわり、と、一瞬だけ、『ワリオ』の体を赤い光の膜が包んで。

「……ふう……戻ったか」

再び開いた青い瞳は、いつものつぶらな瞳だった。3人の口から、安堵の息がもれる。

「ああ、ワリオ！」

「姫。ご心配をお掛けしました」

「申し訳ございません、このような事になってしまって」

「姫のせいではありませんよ。どうかお気になさらず」

お互いを気遣いあうワリオとピーチの様子を見て、翡翠白虎は目

を丸くした。

「ほう！ 紅朱雀の中では粗暴な雰囲気じゃったが、そのような礼儀正しさも持ち合わせておるのか」

「……粗暴で悪かったな」

「けっけっけ。そぼろだつてよー」

「お前の方が大概だろうが！！ つかそぼろじゃなくて粗暴だ！！」
「いいぞー、もっと言ってやれ兄貴ー」

けらけら笑うワルイージ、呆氣にとられるピーチ。そんな様子を見て小さく笑うと、翡翠白虎は言った。

「敵襲前も言っただが…… 黒金大蛇を追って源国に参るのならば、その娘も連れて参るべきじゃ」

「え。ひ、姫も？」

「わしも紅朱雀も、完全に復活したわけではない。小金玄武と紫苑青龍に至っては、目覚めてすらおらぬ。源国にある我らの墓の前で、再び降臨の儀式を行わねばなんのじゃ。しかし……」

一瞬だけピーチのほうをちらりと見てから、再び翡翠白虎は口を開いた。……どこか、躊躇するように口ごもってから。

「今宵のような敵襲は、恐らくこの国だけではない。降臨祭はこの国でも行われているものじゃからの。恐らく我らをこれ以上目覚めさせぬよう、黒金大蛇は世界中にあのような魔物を放っておるはずじゃ。『召喚の儀』の術を持つ者のみを狙うよう命令してのう」

「何だつて!？」

「そ、それでは……!?!」

話が見えてきた。しかしそれは彼等にとって、まさに想像を絶する悲劇。

それを承知の上で、翡翠白虎は悲しげに顔を歪め、真実を告げる。

「ほとんどは根絶やしにされとるはずじゃ。生き残った者として……数は決して多くない。探し出すのは骨が折れるじゃろうな」

思わず4人は言葉を失っていた。

彼等・四聖獣を目覚めさせない為に。自分たちが戦っている間に、すでにそこまでの手を回していたなんて。

自分たちの知らないところで、大勢の人が戦い、傷つき、死んで行くなんて、そんなの。

「……なんてこと。酷い……」

「そなたのような高貴なるお方に、こんな惨たらしい話をして……ほんにすまん。しかし、事実じゃからのう」

顔を手で覆って涙ぐむピーチに向かって頭を下げ、本当に申し訳なさそうに謝ったその直後。

マリオらのほうを向きなおり、真剣な表情で翡翠白虎は言った。

「じゃから、そなたは彼女の傍らにいて、常に守れ。指一本触れさせるでないぞ」

「ルイージの姿で言われるってのが、なんだか複雑だが……」

少しだけ苦笑いを浮かべてから、きりっと表情を引き締めて。大きくマリオは頷いた。

「そんなこと、あんたに言われなくとも分かってるさ」

彼の言葉に応えるように、翡翠白虎も頷き返す。そして、やれやれ、と大きく伸びをした。

「わしもちつと疲れたのう。器の中でしばし休息させていただくぞ」
「おうおう。とつとと緑野郎に戻りやがれてんだ」

「はっはっは、口の減らない奴らじゃ。ほんに面白い……では、また何かあれば出てくるからのう」

ワルイージの悪態にひるむことなくカラカラと笑って、そう言い残し。翡翠白虎も目を閉じる。先程のマリオと同じように、一瞬だけ緑のベールがルイージの体を包んで。

やがて、今までその場にしっかりと立っていたルイージの体が、糸が切れたようにへなへなと崩れ落ちた。

「ルイージ！」

「大丈夫ですか!？」

「はあ、はあ……憑依って疲れるんだね」

肩で大きく息をしながら、ルイージは脂汗まみれの顔を上げる。その表情は苦しげだったが、どこか晴れやかないつも通りの弟のもので。思わず、マリオはほうつと安堵のため息をつく。

やがて、ルイージと視線を合わせるように屈んで、彼の肩を掴んで。今にも泣きそうに顔を歪め、マリオは口を開いた。

「……馬鹿。さっきは無茶しやがって!」

「う、ご、ごめん。あの時は夢中だったんだ。……だけど」

少しびくりと肩を震わせ、それから申し訳なさそうに顔を伏せ。悲しげに唇をかむルイージ。

それから、ぱつと顔を上げた彼は、いつしかマリオと同じ、怒りを含んだ険しい顔をしていた。

「でも、無茶をしたのは兄さんだってそうだよ! 深く考えないで紅朱雀を受け入れようとして!」

「ぐっ」

「さっき叱ったから、これ以上は言わないけど。ボク、もっと兄さんの力になりたいよ」

いっつもお留守番ばかりなんだもの。そう肩をすくめて見せると、マリオも同じジェスチャーをして見せた。

やがて、ゆっくりとふたりはその場に立ちあがる。

大きく長い溜息をついて、ルイージが唐突に口を開いた。

「それにしても、疲れたなあ。ダメージがリンクする分、負担も大きいみたいだし」

「あまり長い時間、ふたりが表に出てない方がいいのかもしれないぞ。こいつ、いつかぶつ倒れるんじゃないの?」

「それはあいつらの気分次第ってやつか」

「気まぐれみてえだしなあ、紅朱雀とかいう赤い神さんは」

あとの3人も口々に言う中、今までずっと目を伏せて考えていた

ピーチが、不意にぱつと顔を上げて口を開く。

その表情は、力強く気高い気丈さにあふれていた。

「マリオ、皆さん」

「「ああん？」」

「は、はいっ」

「何でしょう、姫」

しつかりと話を聞く体制を作るマリオとルイーダ。面倒くさそうに振り向くワリオとワルイーダ。

そんな彼らの顔を見まわし、彼女は口を開く。

「こんな私でよろしければ……」

一緒にお供させて下さい、と言い終わるより前に。

「あの神さんと約束しちまったからな。今更『一緒に行けませんわっ』とか言われても困るっての」

「兄さんだけじゃなく、ボクらもついてます。あんな訳の分からない奴なんかに、絶対手出しさせません！」

「姫さんは姫さんらしく、ちゃんとしてりゃあいいだろ」

「えっ……」

自分が何かを言うより早く、矢継ぎ早に3人にまくし立てられて、ピーチは目を白黒させる。

そんな彼女の前に、一人マリオが歩み出て。

彼は突然。恭しく、ピーチの足元にすっとひざまづいた。

「オレたちに、あなたを守らせて下さい。姫」

「マリオ……」

「今の翡翠白虎の話を聞いて、より一層今回の事の重大さを思い知りました。この国にとってもオレたちにとっても、あなたは絶対に必要な存在なんです」

ルイーダも、兄の言葉に同意するように大きく頷く。

ワリオとワルイーダは……どこか神妙な顔で、マリオの話に耳を傾けている。

「だから、絶対にオレたちの側を離れないで。一緒にオリエント王

国に行きましょう」

「……ええ。ありがとう」

少し涙ぐんだ瞳を細め、ピーチは満面の笑みを浮かべた。
雰囲気は少しだけ和やかになりかけた時。

「あああっ!!」

いきなりそんな空気をぶち破ったのは、ルイージの素っ頓狂な叫び声だった。

「びびび、びつくりさせんなアホ！ いきなりでけえ声出してんじやねえよ!!」

「ご、ごめん。でも、大変なこと思い出しちゃったんだ!」

「大変なこと？ 何だそりゃあ」

眉を潜めるライバルらとは対照的に、マリオとピーチは彼の言葉を聞いて、途端に険しい表情になる。

「ルイージ、まさか!」

「うんっ」

マリオの言葉に大きく何度もうなずいて、ルイージは兄に向かって訴えかけた。

自分とごく親しい間柄にある、『彼女』を想って。

「サラサランドは……デイジーは大丈夫かな!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5571m/>

マリオ・オールスターズ・レジェンド 【四聖獣伝説】

2010年10月14日18時55分発行